

同調圧力を乗り越え、 学校をつくり変える

いま、学校は子どもや教師にとって、どのような存在なのだろうか。2000年代、マネジメントの原理が学校現場にも浸透していき、学校の内実に大きな変化がもたらされた。あたかも企業のように組織立てられ運営されていく力学のはたらく学校が、教師や子どもたちの前に姿を現した。

そのような学校を取り巻く社会状況の変容と軌を一にするかのように、教師の仕事ぶりも行動様式に大きな変化が生じたことも指摘されている。「上から」降りてくるものにただ従うことに何の疑問もたず、淡々と振る舞う教師たち。一方で、そうした組織人としての同調行動に矛盾を感じ、ときには声をあげながら、自身の行動原理に忠実に生きている教師が多数存在することも事実である。

学校を一つの集団生活の場として見るなら、教師も子どもも、閉じた空間のなかでの「濃密な」人間関係がもたらす「内から」の同調圧力に無関心ではられない。そこでおとなも子どもも感じる息苦しさ、現代的な特徴はあるのだろうか。また、「内から」招来するものと、「上から」降りてきたものとはどのように絡みあって、学校という場にどのような「負の」結節点を刻印しているのだろうか。

多くの子どもと教師たちはいま、自由を求めて、圧力に押し潰されそうになりながらも懸命に生きている。「同調圧力」を超えて生き抜き、未来を切り拓いていく子どもと教師たちにエールを送りたい。